

# 地方局アナウンサーのキャリア発達に関する予備的考察

—— 組織のなかで〈アナウンサー〉を生きることの意味 ——

A Preliminary Study on the Career Development of Local Station  
Announcer : Being an Announcer as an Organization Employee

北 出 真紀恵

Makie KITADE

キーワード：アナウンサー、予期的社会化、スペシャリスト、組織

Key words : Announcer, Anticipatory Socialization, Specialist, Organization

## 要約

本稿は、地方局に勤務するアナウンサーのキャリア発達に関して予備的考察を行うものである。スペシャリストとして採用されるアナウンサーはゼネラリストとはキャリアパスを異にするが、日本の経営システムの組織にいる以上、年功序列で管理職となり、アナウンサーをやめざるをえない。本研究では、アナウンサー職を離れて管理職に従事する50代の元アナウンサー二人にインタビュー調査を行った。幼い頃からアナウンサーを志望し、学生時代に実務訓練を受け、アナウンサー試験に合格し、30年以上にわたって活躍してきた二人は、現場を離れても、良い放送のために尽くすことがアナウンサーとしてのキャリアの集大成として考え、専門職と組織人との調整を図っている。彼らの放送メディアに対する強いコミットメントは、ライフコースが放送メディア発展とともにあったことと、アナウンサー受験の際の予期的社会化が関わっていると推察される。

## Abstract

This paper aims to perform a preliminary study on the career development of announcers in local broadcasting stations. Announcers are employed as specialists and follow a different career path than generalists. Although they have to give up being announcers when they take managerial posts in the seniority system of Japanese business management. The author interviewed two managers who were announcers for over 30 years, and who desired to be announcers from early childhood, and took practice training in their school days, and became successful announcers. By analyzing their interviews, we may say that they act as mediators between specialists and organized employee. They also hope to make use of life long experience as announcers to

contribute to good broadcast programs. We can conclude their strong occupational organizational commitment has come from their lifecourse along with the development of broadcasting, and the anticipatory socialization to be an announcer.

## 1 はじめに

本稿は、地方局に勤務するアナウンサーのキャリア発達に関して予備的考察を行うものである。北出（2011）では、フリーランスのアナウンサーに光をあて、そのキャリア発達について検討を行ったが、フリーランスであるからこそ、アナウンサーという専門性を生きること的成功している事例であった。そもそも、アナウンサーという職業は個人のエンプロイアビリティが問われる傾向が強く、独立性が高い。組織内でキャリアを積んだ後で独立し、活躍するフリーランスのアナウンサーたちが数多く存在する。

組織のアナウンサー、いわゆる局アナは、アナウンサー職として職種別に採用され、局内において、報道、制作、スポーツ、事業、営業など各部署との仕事を通してアナウンサーとしての専門的スキルを蓄積していく。アナウンサーのキャリア発達は、ゼネラリストとして採用される一般職員とはキャリアパスを異にする。しかしながら、日本的経営<sup>i</sup>システムにある組織に属していれば、年功序列でいずれは管理職となり、蓄積されたスキルはひとまず棚に置かざるを得ない<sup>ii</sup>。一般職員においては、キャリアの延長線上に管理職が位置するが、アナウンサーにとっては、管理職への移行はコンフリクトを伴う。

職業に対するアプローチやコミットメントが同様であるにもかかわらず、組織のアナウンサーのキャリア発達は独立したアナウンサーとどのように違うのか<sup>iii</sup>。アナウンサーからの離脱という管理職への移行で生じるコンフリクトをいかに調整するのか。これらの問いに答えるのが、本稿の課題である。

研究方法としては、地方局にアナウンサー職として入社し、30年以上のキャリアを持ちながら、現在（あるいは最近）アナウンサー職を離れて管理職に従事する元アナウンサーにインタビュー調査を行った。二つの事例は、いずれも幼い頃からの夢を実現し、30年以上、第一線で活躍したアナウンサーであって、マイクの前に座ることに並々ならぬ意欲を持っていた。断っておくが、アナウンサーが現場を離れる事例は、地方の民間放送局においては一般的であって、個別で特殊な事情ではない。

本稿では、二人の語りを軸に置き、次節において、アナウンサーとしての就職活動に言及しつつ、アナウンサー個人の予期的社会化のプロセスについて述べ、続いて、アナウンサーという職業に対するコミットメントおよび管理職への移行をめぐるコンフリクトについて説明したい。

アナウンサーの職能のゆらぎ（北出、2008）を二事例から追認しつつ、最後に、組織のアナウンサーは、アナウンサーとしての専門職と管理職の任務をいかに調整していくのか、また、組織

人としての職務を遂行しつつ、アナウンサーとして生きるとはどのようなことなのかを考察する。

本研究の予備的考察を糸口にして、地方局におけるアナウンサーのキャリア発達における課題にアプローチするとともに、アナウンサーという職業を相対化するための一助としたい。

## 2 アナウンサーへの道

放送メディアとともに誕生したアナウンサーという新しい職業は時代とともに変容してきた。誕生当時は「標準語の伝達者」と位置づけられていたアナウンサーであったが、放送文化の発展とともに、アナウンサーの職能は多様化していく。(北出、2008)

本研究で筆者のインタビュー調査に応じてくれたAさん<sup>iv</sup>とBさん<sup>v</sup>は現役時代、地域の放送局で大活躍された現在50代後半の元アナウンサーである。

二人は、テレビ放送が大衆化していく昭和30年代に幼少期を過ごしていることに注目したい。

以下、インタビュー調査においてAさんとBさんが語った言葉を引用するが、その記述において

【 】は筆者による注釈、[ ]は内容をわかりやすくするための筆者による補足を意味する。

### 2-1 「国語」の時間のヒーロー（ヒロイン）として

まずは、アナウンサーという職業を意識するきっかけは何であったのかを聞いてみることにした。

豚もおだてりゃ木にのぼる。小学校1年、2年、3年生、4年、5年、6年と、毎年担任の先生変わるの、国語の教科書、読まされるわね。1年生、東山先生、「上手いね、アナウンサーになったらいいね。」2年生、「上手いね、アナウンサーになったらいいね。」3年生、中村先生、4年生、松本先生、5年生、6年生と、毎年言われたらそう思っちゃうのよ。そうかな、僕、上手いかな(笑)。今から考えたら、周りが下手だっただけの話。(Aさん)

小学校3年から。やっぱりね、思い続けることは大事やという話をするのよ。「本読み」あるやん、音読。(中略)母親が本読み、しっかりさせて、得意になるやん。小学校3年生の国語の、最後の授業は、一年間一生懸命やったところ、最初から最後まで読みましょう。一番端の前の席にすわってて、ご指名いただいて、最初に読んだら、最後まで読めた。これ、途中から、ね、考えて。「うわー、トチらへんかな」って、[みんなが]だんだん、応援団になっていくでしょ。で、終わったら、わーって拍手。これやねん。そう、これで、「しゃべり」の道へ(笑)。(Bさん)

奇しくも、アナウンサーへの目覚めは、二人とも国語の授業中に行われる「音読」の上手さで

あった。「正しい発音で上手に原稿を読む」ことこそアナウンサーらしいことであるとの、当時のアナウンサー像がうかがえよう<sup>vi</sup>。

テレビ放送は昭和28年に開始され、昭和34年の皇太子ご成婚を契機に爆発的に国民に受容されていく。高度経済成長とともに放送メディア産業は発展を遂げ、放送メディアも国民に圧倒的な人気を博していく。そのような時代において、「アナウンサー」という職業は、目新しく、また、注目を集めるものであった。アナウンサーに注目が集り、アナウンサーとは何かということが盛んに議論されたのもこの頃である<sup>vii</sup>。昭和30年代のアナウンサーは、新しいメディアの中で生き生きと活躍するスター的存在であった。

## 2-2 アナウンサー集団への予期的社会化

アナウンサーは、職種別で採用される。書類選考に始まり、面接選考が繰り返されるが、そのなかで、カメラテスト、マイクテストといったアナウンサーという職種に適應できるかどうかを試される。東京キー局や大阪の準キー局では選考の過程で「アナウンス講習会」があり、数日間にわたる技能訓練によって適應が可能かどうか多角的にアナウンサーとしての「素質」を試される場合もある。

一般に、採用試験は東京キー局を皮切りに、準キー局、地方局へと順次行われ、アナウンサー志望者は、数少ない採用枠をめざして、全国の放送局を行脚することになる。

アナウンサー採用試験対策の専門学校があり、志望者の多くは大学在学中から通学し、アナウンス技術の研鑽を積む。

大学は放送局〈放送部〉はいりました。アナウンサーになるための情報集めたりしてると「東京アナウンスアカデミー」<sup>viii</sup>ってある。へえ、東京行きたかったなあ。大阪、ないわな。国鉄【現在のJR】の吊り広告で、「アナウンサー養成」って。1回生の7月から行ったのよ。そんなの3回生からでいいのに、行きたい、行きたい思ってるから。30人ぐらいメンバーいたかな？先生は、何人もの先生、納得できる授業やってくれたので。両立できなくなってクラブはやめて。授業は週2回。3、4年後の就職試験は、アナウンサー1本というかんじで。(Aさん)

放送係とか、したよ。中学は体操部やけど、放送係も、したした。高校は放送部。T高校の放送部。(名門ですよ) そう、いつも賞状、ズラーっと貼ってある<sup>ix</sup>。私、こういう仕事したいと思って、T高校の放送部出て、アナウンサーになってる人、いるのよね。お話、うかがわせていただいて。(中略) 私、4年間、めっちゃ厳しい先生に教えてもらったん、生田先生<sup>x</sup>。(中略) 短大やってん。(中略) 19才。最終まで行ったこともあれば、3次でだ

めだったこともある。ふつう、あきらめるやろ？私、あきらめへん。これは、私、19で若いから。4年で受けてやる、と[大学]編入もできるように優の数も取ってるんで、3年に編入して、4年で受けて通った。これ、なかなかの執念やん。(Bさん)

二事例とも大学入学時から、アナウンサー受験のための学生生活を送っている。アナウンサー志望者たちの集団のなかで、先輩の受験を目の当たりにしつつ、アナウンス技能の研鑽を積んでいく。指導にあたるのは、いずれも元NHKのアナウンサーであり、そうした専門学校では、本来は入社してから受けるはずの技能訓練を徹底的に受けることになる。アナウンサー養成の専門学校が設立された背景には、昭和26年の中部日本放送の放送開始に続き、全国各地の民間放送局の開局ラッシュがある。当時は放送タレントも存在せず、アナウンサーの養成は急務であった。地方局においては、入社してから共通語の訓練をしているようではとても間に合わず、入社前からある程度の技能を修得していることは必須であった。

どっか、通るわ。(中略)あの頃ね、変な自信あったね。北は北海道放送、南は南日本放送まで行きまして、最後に残った九州なんて、千人くらい受けに来てました。ふるいおとされました。あした来てください。半分くらい減るねん。また、明日来てください。3日くらいそなん続く。2、30人になったら、「おう」「おう」「おう」になるわけ。「TBS どうなったの?」「ああ、3次で落ちたんだ」って。だから、そう負ける気もなかった。(Aさん)

アナウンサー採用試験、受けてますよ。1次試験、600人。20秒のCM。受験番号283番。見てたら、[審査員]、疲れてるやん。こっち向かしたれ。「私の受験番号は」で止めたってん。ほんなら、こっち向くやん。「283番の、Bです。」(中略)あ、勝った、勝った。絶対受かったわ。(応募者多いですね。)今より多かったんちゃう。当時、アナウンサー採用試験なかったんよ。特に近畿では。準キー局は局アナとらなかった。みんな、契約アナ。TTBからの派遣<sup>xi</sup>。珍しかったの。全国から来てた。東京アナウンスアカデミーとか。(Bさん)

当時はアナウンサー採用試験の際、アナウンスの基礎は修得済みであることは必須であったという。二事例とも、大学在学中はアナウンス専門学校でアナウンスの訓練を受けている。アナウンサー採用試験に合格するもののほとんどが、こうしたアナウンス専門学校出身者であったことを鑑みると、専門学校は受験者にとって予期的社会化をはかる場となっていると考えられる。大学における教育ではなく、専門学校での技能訓練の場が受験者たちを社会化し、アナウンサーへと育て上げていく。キー局から始まり、準キー局、地方局へと続く採用試験では専門学校での同

期生がしのぎを削る形となり、そのような意味で、アナウンサー志望者にとって、アナウンサー職として入社試験に合格することは、一般的な就職活動での内定をもらうこととは意味合いが異なっていた。

### 3 アナウンサーの困難、管理職への移行をめくって

本節では、アナウンサーとしてのキャリア発達と組織人としてのキャリア発達の相克に焦点をあてる。アナウンサーの専門職としてのキャリア発達は、あくまでもアナウンスの技能の熟練にその目的があるのだが、組織人としてのアナウンサーにとって、アナウンサーたちの管理業務を行うアナウンス部長職がキャリアの頂点ではない。なかには、ライン<sup>xii</sup>の管理職としての業務を遂行するため、現場を離れる場合もある。

#### 3-1 アナウンスの実践、アナウンサーとしてのキャリア発達

アナウンサーとして入社すると、企業組織人としての研修以外に、各局アナウンス部において研修が行われる。発声、50音の発音、共通語のアクセントといったアナウンスの基礎を始め、ニュース、レポート、フリートキング等の技能訓練を受ける。その後は、OJT オンザジョブトレーニングである。特に、人員も少なく、研修期間を多くとれない地方局は、即戦力が好まれる傾向があるという。

アナウンサーの業務は大きく分けて、実況アナウンスを行う「スポーツ」と、「ニュース報道」、そして、「ワイドショーなどの進行」の3ジャンルにまたがり、それ以外にも、定時ニュースや提供枠の読み、自社制作のCMナレーションなどの放送運行业務がある。

スポーツや報道ジャンルでは、アナウンスの技能以外に、記者としての取材能力も問われ、ワイドショーでは、臨機応変な番組進行遂行能力が求められることになる。こうした能力は人から教わるより自ら学び取る要素が非常に強い。もちろん、基本的な「原稿読み」に関しては個人の音感に帰する部分が強いが、それぞれのジャンルにおけるアナウンサーの技能はまぎれもなく方法的専門家としての熟練である。

荻谷寿夫(1995)は、組織内準専門職のキャリア研究において新聞記者をとりあげ、記者のような熟練技能は、ゼネラリストやコンサルタントと共通したプロセス専門家の特性であることを指摘している。荻谷は記者の熟練技能がプロセス・コンサルテーションを行うプロセス専門家と類似しており、「実際に事件や現場、問題に直面している人から情報を引き出して、理解可能な形に整理し直し、それを紙面や、指示、コンサルテーションの形でフィードバックする」としてしている。そして、専門的知識については、「情報の取捨選択を行っていくうちに、情報内容についての専門性も養われていくと考えるのが自然」であり、結果として内容についても精通していくことになる。そこで求められているのは「未知の環境下で頼るべき情報源をさぐりあて、情報の

信頼度を図り、取捨選択していく」能力である。記者は限定されたジャンルのなかで情報の蓄積をいかせることにより、内容についての専門家ともなりうるのだという。記者やアナウンサーの熟練技能は専門性があるとされるが、荻谷（1995）に従うならば、それらはOJTで修得されるプロセス専門家の熟練技能である。

そうした事情から、地方局におけるアナウンサーのキャリア発達、実況アナウンスのように職能の修得に時間がかかる「スポーツ」のジャンルを除き、「報道」あるいは「ワイドショー」部門での番組出演の経験に負うことになる。しかしながら、これらのジャンルは大都市圏に比べて自主制作番組数が少なく、活躍の場が限られるという事情がある。熟練した技能が評価されるとも限らない。アナウンサーとしての専門的技能は、周囲からは見えづらく、評価も困難である<sup>xiii</sup>。

### 3-2 マイクから離れること

アナウンサー職で採用され、アナウンサーとして長年業務に従事してはいても、放送局という組織に雇用されている以上、組織人としてのキャリアを積んでいく側面がある。

給与体系も一般職とほぼ同じであり、終身雇用システムのなかにあっては、キャリアを積み、管理職になるのは否めない。アナウンサーにとって、管理業務は、表舞台から舞台裏への業務の転換であり、それまでのアナウンサーとしての専門的業務との不連続を経験することになる。公共放送のように多くの制作番組を持ち、専門的知識を生かすことのできる司会進行や、良質のドキュメンタリー番組におけるナレーションなど、熟練の技能を生かすことのできる機会が、地方の民間放送局に用意されているとは言いがたい。

ある程度、歳いくと管理職になる。部下に仕事をさせて、会議出る。部全体のことを考えて、しゃべる仕事ができなくなる。しゃべることがあり、その一方で管理業務。それで両輪。でも、専念してもらわなあかんって。デスク業務 [専念] してくれて。しゃべりの仕事、一割かな。[アナウンサーは] それはいやなのよ。何のために努力して来たの。逃げたよ。でも、色んな人、説得に来る。はねのけても辞令おりる。報道制作部長。(おいくつぐらいでしたか?) 50そこそこ。しょうがない。部長やったら、55でやめよう。しゃべってたら、[アナウンサー業だったら] 60まで続けてた。(Aさん)

30年表彰、新年式で受けて、これからアナウンサーがんばるぞーと思った時に異動を言われたので。(中略) はあ? 人事担当の常務から言われて [アナウンス部長時代に] 「あ、うちアナウンス部から出る人いません。」と、「そんなん、やっていけません。かつかつでやるし。」そう言うて「アナウンサー出たくない」て。「誰ですか」言うたら「あんたや」て、ええかげんにしてくれ (笑)。「私ですか? 何で?」どこへ行くとかではなくて「何で?」。

いや、やってほしいことがある。それが、編成制作局長。(中略)でも、私、しゃべりの仕事がなくなるとは思ってなかった。[私から]しゃべりをとることないと思えへん?(Bさん)

幼い頃からのあこがれを実現し、日々研鑽を積んできたアナウンサーとしての自負を持ちマイクに向かう、特にレギュラー番組をもつこと、番組を主宰することは、自らが必要とされていることを確認できる作業である。放送に対する責任を誰よりも負う、それが放送の最前線に位置するアナウンサーの喜びでもある。管理職になるということ、それは、マイクから離れることであり、これまでのキャリアからの離脱である。Aさんは制作業務を兼ねることや管理業務を兼ねることに抵抗はなかった。しかしながら管理業務に「専念」することには抵抗を見せた。Bさんは当初、アナウンサーでありながら管理職を遂行するものだと思い、アナウンサーをやめることになることは想定外であった。

二人は、アナウンス以外の業務を兼務することには肯定的であるが、アナウンサーを退くことには強い否定の感情を持っていた<sup>xiv</sup>。

#### 4 アナウンサーの専門性の揺らぎ

正しい日本語の伝達者から、放送文化の担い手へ、アナウンサーが期待される職能および番組の中での役割は時代とともに変化してきた。(北出、2008)

1980年に発刊された『NHK 新アナウンス読本』では、「アナウンサーは、この多様な、番組という形をとる情報伝達の中で、多くの職種が準備を重ねた最後の段階で、音声言語による表現を担う職種です。それがアナウンサーの役割です。」と述べられている。アナウンサーの役割は「共通語の担い手」としてではなく、放送番組出演者として多様な能力を期待されるようになった。また、その一方で、アナウンサーのような役割を担うタレントも多く見られるようになった。レポーターだけでなく、司会進行の上手さに定評があるタレントや、報道キャスターをやすやすとこなしてみせるタレントも存在する。

長年、アナウンサーとして活躍し、アナウンサーが期待される専門性の変化にも自らも対応しつつ、管理職として新しい人材の採用や教育・研修にもあたってきた二人は、アナウンサーの専門性について、どのように考えているのだろうか。

アナウンサーと記者の区別なくなってきた。厳密にいうと、しゃべりの基礎というのを知っているのと知らないのでは違うだろうし。日本語しゃべれるのは当たり前。最近の例でびっくりしてるのは、Kくん。トレーニングなし。大学は関西。デビューした時、うわ、これ、だいぶかかるなあと思ったけど、何とかなって。Tさん。NHKに一般職ではいって途中で



アナウンサーに。そんなん、あんのん。昔は、技能に重きを置きすぎて、しゃべりは達者やけど筆記のほうがだめやという方多かったから。だから、僕らの頃くらいから、まず、筆記でふるいにかけるといのが増えてきた。(中略) 指導する先生は、共通語、無声化うんぬんも大切やけど、英語教えないかんとか、国語教えないかんとことは言うてはった。一般常識含めて英語力も。そういうお勉強も教えなあかんと。日本語しゃべるのは当たり前みたいになってるわけやし。ワイド [ショー] はアナウンサーだろうがタレントだろうが使う側はどっちでもいい。(Aさん)

私らの頃と今の子ら、違うからね。制作費激減で、内部制作。番組いっぱい持てる。あたしらは、番組を持つってすごいことで、フリーの人と同じ土俵。お声がかかってなんぼ。「習うより慣れろ」で、わ、こんな上手くなったんか。(中略) アナウンサー採用試験の審査員するやんか。最初は予備面接するんですよ。そのあと専門職であげてきて、アナウンス部長が見るんですね。一生懸命アナウンスの勉強してきた、どうのこうのじゃなくて、この仕事おもしろそう、やってみたいな。[という人が増えている。] どこをチェックするかというと、飛ぶ「音」がないか、出ない「音」がないか、鼻濁音も含めてチェックする。それで大丈夫やったら、いつも上にはいうんやけど、どんな子でもしゃべらせてみせます。欠陥がなければ、それで、アエイウエオアオ、腹式 [呼吸] やって、4月に預かって、7月の高校野球の前くらいには初鳴き【新人アナウンサーの初めての声出し】できるように。(中略) あたしらはそんなことありえない。ちゃんと発声、発音できないとありえない。でも、今、違う。(中略) 基本ができてないとか、ものごと知ってないと違う。私らとは全然違う。今の子らは標準語【共通語】しゃべれるよね。音感、いいよね。(Bさん)

現代のアナウンサーは基本的アナウンスの技能だけでなく、多様化した放送の送り手であることが求められている。(北出、2008) Aさんが言及しているのは、一般社員と同じ選考基準をクリアする能力への期待であり、Bさんの指摘は、今やアナウンサーとしての技能は方法的専門家としての熟練技能(荻谷、1995)なのであって、それらはおもにOJTで会得されうる技能であることを示している。AさんやBさんがアナウンサー職採用試験を受けた頃には必修事項であった「アナウンスの基礎」は、必要とされていないわけではないが、優先順位が下がっているのは明らかであり、それは放送の草創期からアナウンサーたちが共通語をつくりあげ、洗練化し、国民に伝えてきた苦闘の歴史の成果に他ならない。「音感、いいよね」という発言にあるように、共通語の習得は、今や、若い世代にとってそう大して困難な課題ではない。

## 5 地方局で〈アナウンサー〉を生きる

子どもの頃からアナウンサーにあこがれ、アナウンサーになるための努力をし、またアナウンサーであるために日々精進してきた二人のベテランアナウンサーは、アナウンサーを退くこととどのようにして折り合いをつけたのだろうか。

あのね、他の社員見てたらね、本当に放送好きなの？悪いけど、コネ入社【縁故採用】多いやん。頼むから仕事してえな。いかに放送に対する責任を持っているのはアナウンサーだという自負が芽生えてくるよね。現場にいるとね。放送の恐さも、楽しさも、仕組みも一番わかっているのはあんたらじゃない。アナウンサー、いつも、最前線に真剣にいて、営業も事業も放送につながるんやと意識が。放送大好きな人が集まってると思ったら、そうでもないのよね。就職のとき、他の選択肢があるのかわからないけど、アナウンサーめざしてた人との温度差があるように思う。アナウンサーだろうが、営業だろうが、より良き放送めざそうや。放送に関わる仕事や。(振り返って、アイデンティティは?) 放送マン。制作現場、かね。(Aさん)

うちの会社があって私やと思ってるから。アナウンサーとして採用された。まだまだ未熟なのに、現場でスタッフと仕事ができて、自分が作られて来た。それって、30年の積み重ねなので。うちの会社で、なので。会社をはずれて、私はない、と思う。会社の歴史も、開局60周年。音楽シーン作りだしたのも、私らの先輩やし、いうこともあるし。(中略) アナウンサーとは、いう話になるとね、その年、時々のアナウンサーがある。生活し、人生に重なっているアナウンスメントがあるっていったの。それは、若いからいいってもんじゃないくて、50やったら50の、60やったら60のアナウンスメントがある。それでいこう、思ってたのに、それがこう。とまどったし、わからんことばかりやしな。でも、ラジオに関わっているので、自分がしゃべりかけていた「あなた」「あなた」いうてた「あなた」と実際にえるのよ。このポストは。イベント行ったり、お食事会行ったりしたら、「わあ、30年、この声、この声」って、みんなバーッと来はる。自分は、今までの30年を確認してるんやな、と。それが喜びに変わってるねん。(Bさん)

二人の放送メディアに対する強いコミットメントは、アナウンサー受験の際にすでに形成されていたと考えられる。アナウンサーという職業人としてスタートしたキャリアであるが、放送局という組織のなかで、組織に対するコミットメントを持つようになった。

日本の企業では職種別採用より職種を限定しない形の採用が支配的であり、多様な職種に就くことは職種間での協力体制が組織内で構築されやすく、従業員は職種より企業と一体感を持つ傾

向があるという。(山岡、2010)

アナウンサーとしてのキャリアは、スポーツ、報道、制作、営業、事業など、社内各部署にまたがる。一般職員が異動しつつ各部署の仕事を経験するようにアナウンサーはアナウンサーとして、放送局の全ての部署と関係しつつ、放送業務に関わることによって、放送局と一体感を持つようになる。

専門職でありながら、放送局に雇用されるアナウンサーは、地方局のなかで横断的にキャリアを積んでいくことで、専門人としてのみならず組織人として社会化されていくのであろう。

Aさんは「最初はアナウンサー」であったが、「より良き放送のために」、人手が足りないのであれば制作の業務をすることには少しも抵抗を感じなかったという。「良い放送を届けたい」、それがAさんの思いである。地方局においては、「放送メディア」が好きで放送局に勤める人のみならず、地域における産業の一つとして選択する場合も多く見られる<sup>xv</sup>。アナウンサー職をめざし、全国どこへでも行くということは、職業に対する強いコミットメントであり、彼ら彼女らにとっての採用試験受験前の訓練は、放送メディアへの強いコミットメントを生み、「放送メディア」産業の組織人として社会化させることに機能している。

Bさんは、「大好きなラジオのために尽くしたい」と述べる。ラジオのスタジオから語りかけていた聴取者と実際に会い、コミュニケーションをとること。それが喜びであり、これまで30年にわたって積み上げてきたラジオ出演のキャリアを確認することにつながるという。そこには、アナウンサーという職業に対する誇りと、「会社のために、ラジオのために」という、組織に対する紛れもないコミットメントがある。

二人のキャリアはアナウンサーという専門職としてスタートした。組織において、経験を積み、アナウンサーとしての技能も蓄積しつつ、アナウンサーへの役割期待の変化にも第一線のアナウンサーとして身をもって経験し、対応してきた。組織のなかで、アナウンサー採用人事にも携わり、新人の研修も担当した。アナウンサーという仕事に誇りを持ち、アナウンサーという職業を客観的にもみつめている。二人のワークキャリアの最後は、いずれも放送メディアの担い手としてのキャリアである。

アナウンスの達人としてではなく、放送メディアの送り手として生きる。

放送の現場を離れてもなお、二人のキャリアは、アナウンサーとして重ねてきた経験の延長線上にあり、アナウンサーに寄せられる役割期待に適切しているといえよう。

その意味で、現場を離れることに対し抵抗をみせつつも、二人はコンフリクトを調整し、「良き放送のために」尽力することで、地域社会におけるメディアの送り手として今もなお〈アナウンサー〉を生き続けているのではないか。

それは、放送メディアが輝きを放っていた時代から、長年にわたるアナウンサーとしての経験があるからこそ成立する地平である。こうした地域メディアを担うという自負は、地域メディア

特有のものなのか、コーホート特有のものであるかは、更なる継続的な調査・検討が必要であろう。

最後に、地方局におけるアナウンサーの現代的課題について述べておきたい。

アナウンサーの専門性は揺らぎ、最近では予備的技能訓練もなくアナウンサーとして採用される事例も見られ、アナウンサーは、以前に比べて開かれた職業となった。その分、職業に対するコミットメントは低いとも考えられる。また、地域経済の衰退を背景に地方局の経営はどこも厳しい。

しかしながら、放送局という事業体は他の事業体とは違い、メディアとしての社会的責任を担う。地域メディアの担い手としてのキャリア発達は、職業に対するコミットメントと密接な関わりをもつ。熟練の職能が評価されにくくなった時代のアナウンサーは、仕事に対するモチベーションをどのように継続させていくことができるのか。良質な放送文化を生産するために、次代の担い手をいかに育てるかは、これからの地方局の課題であるといえる。

- 
- i 日本の経営の代表的な特徴は、終身雇用、年功序列、企業別労働組合の3点が挙げられる。また、新規学卒者を中心に採用する人材採用方式も日本の経営の議論として注目される。入社時のスタートラインを揃えることは、年功序列に基づく人事処遇の合理性がある程度保たれることになる。日本のマスメディア企業のジャーナリズム批判の背景には、こうした日本の経営システムによる人材登用、管理にあることがしばしば議論される。
  - ii 日本のメディア企業は欧米のメディア企業とは異なり、日本の経営システムによって成り立っている。
  - iii 独立したアナウンサーのキャリア形成については、(北出、2011)を参照されたい。
  - iv Aさん：昭和28年生まれ、男性。大学卒業後、昭和50年広島テレビ局にアナウンサーとして入社。昭和52年、大阪のラジオ局に途中入社。スポーツアナウンサーを経て、ワイド番組を中心に活躍。平成16年報道制作部長。平成20年早期退職。Aさんへのインタビュー調査は2011年9月23日大阪市内にて実施された。(所要時間：約2時間)Aさんは現在、隣に暮らす母親の介護中である。音訳ボランティア、日本語教師ボランティア、その他団体の世話人などをボランティアで努めている。
  - v Bさん：昭和30年生まれ、女性。昭和55年、京都のラテ兼営局にアナウンサーとして入社。アナウンス部長を経て平成21年よりラジオ編成制作局長。Bさんへのインタビュー調査は2011年10月8日京都市内で実施された。(所要時間：約1時間)公務員の夫と息子、要介護の両親と暮らしている。女性の局長職は、同局において初めてである。
  - vi アナウンサーを志すきっかけとして国語の時間の音読をあげるのは珍しいことではない。筆者も参加して行った「企業ジャーナリストのライフコース調査」(2010-2011実施)においても、アナウンサーとして入社した女性で同じ理由が見られた。
  - vii 規格化されたアナウンサーの語りに多くの批判が寄せられた。詳しくは(北出、2008)を参照されたい。
  - viii アナウンサー受験のための専門学校。昭和26年、元NHKアナウンサー市原光隆によって東京で設立。

現在までに 5700 名のアナウンサー、タレントを輩出している。

- ix NHK 杯全国高校放送コンクールは、昭和29年から続く学校放送のコンクールであり、団体競技である番組制作部門の他、個人競技であるアナウンス部門、朗読部門がある。県大会を経て全国大会へと進む。Aさんの出身高校は、大会常連の強豪校である。
- x 生田教室は、大阪にある元 NHK アナウンサー生田博己主宰の職業訓練校である。現在までに西日本を中心に 589 名のアナウンサーを輩出している。
- xi 男女雇用機会均等法以前は、長い間女性社員の採用は行われておらず、女性アナウンサーは、契約社員もしくはプロダクションからの出向であった。詳しくは（北出、2011）を参照されたい。
- xii 組織構造の中核にあり、職務に関わる指揮・命令を一元的に行う。
- xiii 地方局においては、アナウンサーが記者職やディレクターを兼任する場合もある。また、それを機に自ら制作や報道へ軸足を移す例もあれば、放送局の規模や自主制作比率などによっては他部署への配置転換もある。
- xiv これまでも、アナウンサーからの別業種への配転を争点とする裁判が各地で行われている。アナウンサー職として採用された労働者について、労働契約において職種限定を認めることについては、昭和期の裁判（中部日本放送事件、日本テレビ事件、アールエフラジオ日本事件、宮崎放送事件）では肯定的判決であったが、平成7年の九州朝日放送事件においては否定的であった。アナウンサーの職能は一般的な大卒ホワイトカラー層労働者とくらべても特殊性の高いものではなくなったという理解である。詳しくは（中村、1999）（原、2000）などを参照されたい。近年は、アナウンサー職としての採用ではなく、一般職の枠組みのなかでアナウンサーとして採用する放送局もある。
- xv 筆者が参加した「企業ジャーナリストのライフコース調査」（2010-2011）では地方局の社員においては、就職の動機が「地域の主要企業のひとつ」である場合が見られた。放送産業が発展しつつある時代においては、紛れもなく「優良な就職先」であった。

#### 〈文献〉

- 荻谷寿夫, 1995. 組織内準専門職のキャリア研究—新聞記者の場合—, 六甲台論集 42 (2) 巻 経営学編, 神戸大学大学院経営研究会, pp.61-75.
- 北出真紀恵, 2008. “声” のプロフェッショナル—アナウンサーの職能の変遷—, 東海学園大学研究紀要第13号, pp.53-69.
- 北出真紀恵, 2011. フリーランスとライフキャリア—フリーアナウンサーを事例として—, 東海学園大学研究紀要第16号, pp.65-81.
- 中村和夫, 1999. 判例研究 アナウンサーに対する配転の効力—九州朝日放送事件, 静岡大学法政研究 4 (1), pp.145-154.
- 原昌登, 2000. 労働判例研究11 アナウンサーとして長年勤務してきた労働者に対する異業種への配転命令とその効力 九州朝日放送事件, 法学64 (1), 東北大学労働法研究会, pp.131-137.
- 山岡徹, 2010. 日本的経営. In:田尾雅夫編, よくわかる組織論, ミネルヴァ書房, pp.156-157.